



CEReS

Newsletter No. 62

Center for Environmental Remote Sensing, Chiba University, Japan

千葉大学環境リモートセンシング
研究センターニュース 2011年1月
発行：環境リモートセンシング研究センター
住所：〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33
Tel: 043-290-3832 Fax: 043-290-3857
URL: <http://www.cr.chiba-u.jp/>

<調印式報告> 千葉大学・パジャジャラン大学との大学間交流協定

2011年1月28日、インドネシアのバンドンにあるパジャジャラン大学(UNPAD)において、千葉大学とパジャジャラン大学との大学間交流協定の調印式が行われました。千葉大学からは、学長代理として国際化の推進/国際戦略担当の安藤昭一教授(融合科学研究科)、ヨサファット准教授(CEReS、融合科学研究科)、本郷千春助教(CEReS、理学研究科)の3名が出席しました。また、UNPADからは学長Ganjar Kurnia教授、副学長のZulrizka Iskandar教授、国際交流課長のRamdan Panigoro教授をはじめとして、関連する8分野の学部長など総勢20名が調印式に出席しました。

最初に人材開発担当責任者で農業工学が専門のハンダルト助教から、今回の調印に至るまでの交流の経

過報告がありました。本交流は1999年に環境健康フィールド科学センターの高垣美智子教授とハンダルト氏との出会いに始まりました。その後、千葉大学では高垣教授が、UNPADではアリスフヤンディ講師が交流の窓口となって、2000年10月より、ハンダルト氏を千葉大学への大使館推薦枠国費留学生(自然科学研究科前期、後期)として受け入れ、ハンダルト氏は博士の学位取得後の2006年4月に帰国しました。その3年後の2009年には、UNPAD副学長ズールリズカ教授、連携責任者で医学が専門のラムダンパニゴ



両大学の交流過程を報告するハンダルト氏

ロ准教授、ハンダルト助教らが齋藤学長を表敬訪問しました。そして、インドネシア校友会設立を推進することについて調整を行い、UNPADからは千葉大学との交流を今後も積極的に推進したいとの申し出がありました。これを受けて2009年7月に、ヨサファット准教授と本郷助教が教職員や学生に特別講義を行い教育の交流を深めました。さらに、本郷助教が中心となってバンドン郊外での共同研究を実施し、学術・研究、実習指導の場を通じて緊密かつ実践的な関係を構築し、今日に至りました。



調印式の様子



記念品の交換



交流協定に調印後には、UNPAD 学長 Ganjar Kurnia 教授および安藤教授からのスピーチがありました。さらに、千葉大学から出席した 3 名と各学部長らが一同に会した討論の場が設けられ、学生・研究交流の関する具体的事項に関する活発な質疑が行われました。そして、今後は J-PAC や論博プログラムなどの制度を活用して学生派遣を行い、積極的に交流を深めていくことを合意し調印式を閉幕しました。

(本郷千春)

“International Symposium on Radiative Effect of Atmospheric Brown Clouds”に参加して

2011年1月12～16日、中国雲南省景洪で標記の国際シンポジウムが開催され、参加したので、旅の印象も併せて簡単に報告したい。

Atmospheric Brown Clouds (ABC) とは、文字通り大気中の褐色雲のことであるが、その内容は、放射や気候に影響を与えるエアロゾルから雲に至る幅広い浮遊微粒子群をさしている。なかでも比較的強い吸収性物質を含む浮遊微粒子が注目されている。こうした物質が厚く大気中に存在すると、健康に影響を与えたり地表での日射が遮られるだけでなく、大気中での日射吸収による加熱で局地循環を変えることがあると予想されている。こうした効果が長期に続けば気候に影響を与えることが懸念されており、その効果を明確にする必要のあることが、IPCCの第4次報告書にも示されている。

発展著しいアジア域では、経済活動の拡大とともに環境汚染も深刻化しつつあり、大気環境も例外ではない。中国では、北京オリンピックを契機として大気汚染に敏感になってきており、オリンピック期間中は車両の規制や工場の一部操業規制などがあったことは記憶に新しい。ABCの”A”は当初Asiaのそれだと形容されたこともある。



写真：国際会議の開催された景洪市内。タイ風の看板が印象的。

シンポジウムでは、こうした中国の現状についての、エアロゾルと大気汚染物質を中心とした観測、解析、およびモデル開発などが中心となった。エアロゾル観測は、気象局と科学院の2系列が行っており、組織的なネットワークではスカイラジオメータと同様の機能をもつCiMEL社製サンフォトメータによる気象局のネットが注目される。AERONETと同様であるが、AERONETには参加しておらず中国独自で行っている。衛星事業が急拡大するなか、こうした地上での観測も重要視されつつあるようだ。一方モデルは、気象科学院の化学輸送モデルについての発表が興味深かった。参加者は30名弱であるが、中国国内の参加者は、中国科学院傘下の研究機関、北京大などの大学、環境関連研究機関、気象研究学院等に所属する研究者であり、この分野を牽引する研究者である。国外からはソウル大学、東北大、千葉大であった。

景洪（雲南）は数10kmでミャンマー国境という位置にある、タイ族を中心とした街である。熱帯に近いせいもあって半袖もちらほら見られる陽気で、市内の街路樹は檳榔や棕櫚、フェニックス等の熱帯樹が道路に覆い被さるように茂っているのが印象的だった。市内を瀾滄江という大河が悠々と流れ、メコンとなってベトナムに流れ出る。乾期のせいもあって水位は雨期より2m位低くなっているように見えるが、河岸にある船着き場にはかなり大きな船が泊まっている。この地の特産は、原産でもあるプーアール茶やバナナ、パイナップルなどで、街を少し出ると、山がちのところに一面のバナナ畑があり、収穫時期とあって垂れ下がった房に青いカバーが掛けてある風景が広がる。北京から遙か彼方のこの地でも、道路や建物などインフラの整備は目を見張るものがあり、発展の恩恵が広がっているのを実感するものであった。

(高村民雄)